

## 「星の王子さま」から



学校長 早坂重行 博士（教育情報学）

ぼくは、月の光で、王子さまの青白い顔を見ていました。そして、いま、こうして目の前に見ているのは、人間の外がわただけだ、「ばんたいせつなもの、目に見えないのだ……」と思っていました。

サン＝テグジュペリ作 内藤濯訳 「星の王子さま」から  
（下線 引用者）

ある若い先生とお話をしていた際に、「校長先生はなぜ先生になろうと思ったんですか？」と聞かれたことがあります。私は何も考えずにその時思った通りに、次のように答えました。

「あーそれはね。オレのおやじが体育の先生ですんごくラクそうだったんだよね。中間試験の時とか午前で帰ってくるし。」

まじめに聞いてきたその若い先生は、思いもよらない校長からの返答にポカンとして、どうリアクションをしていいかわからないみたいでした。あとから、考えると、校長がこれから頑張ろうと思っている若い先生に贈る言葉としては、あまりふさわしくなかったと思って反省しています。ごめんなさい。日本人の名誉のために言っておきますと、何度も専門のバレーボールや、あるいは専門外のバスケ、トボール、スキーでもインターハイ、国体にチームを出場させた名伯楽であったことは事実です。まあ現在の基準から見ると昭和のワルの体育教師でしたが……。

内田樹（二〇二二）は「教員志望の若者が減っている」と現場でも話題になります。教職を目指す若者が増えるためには何が必要だとお考えになりますか？」という質問に次のように答えています。

先生たちがこわばった顔をしていて、ぴりぴりしていて、若い人に「お前ら、教師の仕事をなめるんじゃねえぞ」とか脅していたら、そりゃ若い人は来ませんよ。人に来てほしかったら「いやー、教師は楽しいなあ」って本気で言わなければダメです。（中略）教師というのは医療従事者と同

じで、「そういう傾向」の人が就く職業だからです。なんとなく教師になる。どうして教師になったのか、訊かれてもうまく説明できない。それが「傾向」ということです。だから、若い人の一定数は「教師になりたい」とぼんやり思っています。その人たちが来るようにすればいい。それだけのことです。

内田（二〇二二）によれば、父の言動も悪いものではなかったようで、安心しました。それでも、私は、その若い先生に申し訳ないと思つて、次のようにあとから付け加えました。

これは、教師になつてからだけれども、ハンドボール部の顧問をやつていた時に、はじめて試合に出る緊張しまくっている生徒をコートに送り出した際、「この子は一生この瞬間を忘れないだろうなあ」と思つたことがあります。人の成長に直接に、そして深く関われることは、とても大きな（教師としての）喜びですね。

今、インターネット上には、様々な情報があふれています。しかし、紙に書かれた本を読むことは大事です。編集者とか、第三者の目を経て刊行されている本は我々の考えのきちんとした根拠となります。そして、われわれに論理的に考える筋道や、そして感情を大切にすることの素晴らしさ、結果として、物事を深く見ることを教えてくれます。教師として、教育学者として、私はそのような体験をし、実感しております。

近田（二〇二四）は、高校と大学の学びの違いについて次のように述べています。

大学での学習が、高校までの勉強と大きく異なる点は、周りが与えてくれるものを吸収する学習スタイルから、問題意識をもつて自発的に学習課題に取り組む姿勢が不可欠になるといふことです。自発的に学ぶということは、「自分の頭で考える習慣をつける」ことにほかなりません。

大学での学びのレベルを上げるため、二年生には高校時代から「自発的に学ぶ」ことを少しずつでも実践してほしいと思います。大学、大学院そして社会に出て深い学びをしている先輩たちは、高校時代から「自発的に学ぶ」姿勢がありました。「自発的に学ぶ」ことを目標に、「自分の頭で考える習慣をつける」ために、本（文献）を読むことが大切になってきます。

この文集の皆さんの読書感想文に期待して、巻頭言といたします。

参考

・サンリテグジュベリ作 内藤濯訳 『星の王子さま』 岩波書店

・内田樹（二〇二二）『複雑化の教育論』 東洋館出版社

・近田政博（二〇二四）『改訂版 学びのティップス 大学で鍛える思考法』 玉川大学出版部